28PA-pm443

田代三喜『酬医頓得』における薬物理論の検討

〇鈴木 達彦[1]（[1]帝京平成大薬）

【目的】田代三喜の薬物書に『當流能毒集』がある。三喜に師事した曲直瀬道三は薬物理論を継承して自身の薬物書を著し、以後、写本と刊本を合わせて多くの曲直瀬流の薬物書が成立した。これらの薬物書は「能毒」と称されるため能毒書とする。曲直瀬道三以後の能毒書は資料数が多いが田代三喜のものは極めて少なく、三喜の薬物理論を定義するうえでは傍証にかける。本研究では田代三喜『酬医頓得』に含まれる能毒関連の記載と『當流能毒集』の記載について注目し、田代三喜の薬物理論の背景について検討した。

【方法】田代三喜の能毒書である『當流能毒集』（内藤記念くすり博物館 T0293 および武田科学振興財団杏雨書屋乾 1801）と『酬医頓得』（名古屋大学附属図書館医学部分館にカラー複写が所蔵）における能毒の記載について比較検討した。

【結果・考察】田代三喜『當流能毒集』から初期の段階で派生したとみられる曲直瀬流の能毒書には、京都大学附属図書館富士川文庫所蔵『能毒全幷追加』（ノ/5）、武田科学振興財団杏雨書屋所蔵『薬性能毒』（乾 5329）、およびエーザイ内藤記念くすり博物館所蔵『當流日用薬性捷径』（37982）があることはすでに報告した。三喜の能毒書とこれら曲直瀬流の初期能毒書を比較すると、三喜は生薬の表記に独自の作字を用い、五臓に働く生薬ごとに区分して収載しているのに対し、曲直瀬流では一般的な生薬表記であり、五臓の区分を採用していない。一方、『酬医頓得』の能毒関連部分では収載生薬は少ないながらも、『當流能毒集』と同様に作字と五臓の区分を採用している。『酬医頓得』では仏教における五大と中国の五行説および五臓を結び付けて医学理論を示している。三喜の能毒書における五臓による生薬の区分には仏教医学の影響を推し量ることができる。